

月刊ウィーン

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊31年目 Nr. 363

GEKKAN-WIEN 2020年1月号





杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 96

公開シンポジウム「エネルギー社会と原子力・新たな合意をめざして」福島第一原発事故と地球温暖化から考える」が日本学術振興会・先導的研究開発委員会「未来の原子力技術」の主催により、十二月二日（日）、東京大学の伊藤謝恩ホールで開催された。福島第一原子力発電所の事故から八年余りが経過した今、この事故の与えた影響を改めてしっかりと認識し、これを踏まえて、人類が位置づけるべき「エネルギー社会と原子力」はどうかあるべきかを改めて検討し議論することが大切と考える。言い換えると、原子力エネルギー利用の社会的課題、技術的課題を冷静に分析・議論し、その上で原子力利用の可否を追求するとともに、

社会の合意形成を目ざすことこそ、私達に求められていることであろう。本シンポジウムでは、参加者とともに、我が国の原子力エネルギー利用の在り方をテーマに、それを私達自身の身近な問題としてとらえ、持続可能なエネルギー社会の実現に向けての道を考える機会とするのが本会合の趣旨である。会社員、官庁、大学関係者、学生、主婦など約一六〇名の参加があった。

第一部「福島第一原発事故から考える」では、伊澤双葉町長より「東日本大震災・原発事故と双葉町の復興状況について」、蜂須賀大熊町商工会長より「地域の復興と未来に向けて」、山田東海村長より「福島第一原発事故後の東海村における原子力への取組」題する講演があった。第二部「地球温暖化から考える」では、渡部氏（東大



大気海洋研究所教授）より「地球温暖化の現状と予測」社会の抱えるリスク」、山地氏（地球環境産業技術研究機構副理事長）より「二酸化炭素正味ゼロ排出の課題」と題して講演された。第三部「総論討論」では分科会からの報告後、一部と二部の講演への参加者の質問に対して回答があり、その後、前半のテーマ「福島第一原発事故の教訓と今後の課題」に対し、守屋氏（元日立GE 技師長）より原子力安全技術者の立場から、村上氏（日本エネルギー経済研究所マネージャー）より原子力の世界動向などについてコメントした。後半のテーマ「新たな合意をめざして」に対し、伴氏（原子力資料情報室共同代表）から脱原発の立場から、福嶋氏（自分ごと化会議イン松江共同代表）から市民会議の取り組みについてコメントを述べた。一部と二部の講演者を含む全九名のパネリスト間で活発な討論があり、会場は盛り上がった。若手

や学生、女性の参加も結構あり、アンケートからも高い評価が多かった。さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の由緒あるホテル・旅館（その二）について述べる。ウィーン最古のホテルの一つ、ホテルケーンニヒ・フォン・ウンガルンは一七四六年創業、シュテファン大聖堂からわずか五〇mと市内中心部に位置している。ホテル名（ハンガリー王）は、帝国時代に、この場所によく滞在したハンガリー貴族にインスピレーションを得ている。かつては大司教のゲストハウスであり、現在も文化、オペラ、コンサートなどに興味のある方に特に人気があり、著名人が宿泊している。全客室が個別のデザインで魅力的な内装となっており、ガラス張りの中庭では、伝統的な雰囲気の中でくつろげる。本ホテルはマリーアイ・シャーンドルを始めとする作家の作品にも登場している。

余談であるが、筆者は公開シンポジウムでは副委員長として第一部の司会を務めた。ケーンニヒ・フォン・ウンガルンに泊まったことはないが、隣のモーツアルトハウスには何回か行った。柵屋旅館にも泊まったことはないが、近くの和風料理屋で食事をしたことがある。今月も両市の由緒あるホテル・旅館にまつわる話を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部

に撮影をお願いしたケーンニヒ・フォン・ウンガルンの写真を掲載させていたたく。

杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長



杉本純の原子力の話 II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています：<http://wattandedison.com/>



Ludwig van Beethoven

1770年12月16日頃 ボン生
1827年3月26日 ウィーン没

ベートーヴェン 2020

Österreichische Nationalbibliothek
PRUNKSAAL

今年はベートーヴェン生誕250年にあたり、ウィーンでも様々なイベントが用意されている。オーストリア国立図書館の豪華バロック図書室プルンクザールでは既に12月下旬から特別展『ベートーヴェン。人間の世界と神々の閃光』が開催され、貴重な自筆の楽譜や書簡など約100点を展示。2001年ユネスコ世界記憶遺産登録『第九』オリジナル手稿（歌詞 Freude, schöner Götterfunken 入り）はベルリン図書館からの貸出。



ベートーヴェンが亡くなった部屋にあった月桂樹の枝の押し葉 1840年頃

